

MP不足召喚術師エルフは
召喚獣にカラダでお支払いする



MP不足召喚術師エルフは
召喚獣に



カラダでお支払いする

「おやすみなさい。
愛しの勇者様♡」

私達、勇者一行は、
激しい戦いを終えて、
冒険者の宿に辿り着きました。
私はカレン・エルフギア…
勇者様にお仕えする召喚術師です。



「今日はカレンが居なければ勝てなかったよ…
最後…スパイダーモスの召喚が効いた…」

ボクは君がMP切れだと思っていたから…驚いたけど…」

激戦で宿に着くなり仲間たちは爆睡で、でも勇者様は、
私におやすみの挨拶をしてくれています…。

「カレン…今夜は一緒に居たい…」

勇者様は、私に夜伽を求められました。

それは不思議ではありません…

私達は恋人同士でもあります。

…でも…

「申し訳ありません…」

私も御側に居たいです…ですが…」

「今日は元気いっぱいのカレンさんも魔力を使いすぎてしまったのです！だから独りになって瞑想してから休む必要があります。」

私は、なるべくウツを少なく罪悪感のないように夜伽を断りました。

気遣いの言葉をかけて戴いて、勇者様は自室に向かいました。

ホントは抱き着いて泣きたかった…でも…できなかったのです…なぜなら…



すでに私の服の中で、
MP不足で呼び出された
召喚獣が、
不足分を取りに
蠢いていたのです。

「勇者様…次はもう少し
堅実に戦いましょうね…。」

勇者様の後ろ姿に、そう声をかけようとしたが、
膣の中をうねりながらかき回す蟲がそれを許しませんでした…。





部屋に入ると身体を這いまわっていた召喚獣はすぐ私に襲い掛かり、粘性の糸で私の身体を縛り上げて、狭い宿の部屋に吊るしました。糸を吊るしている柱が、ギシギシと音を立ててわたしの身体が揺れる度に、糸は強く私の皮膚に食い込んで、身体の血流を止めて私の身体を痺れさせます。痺れて敏感になっっている全身の中で、

膣内で蠢く

蟲の感覚だけが

際立つて

感じ取れます。

それを知る蟲は

敏感に充血した膣を

ねじるように

うねりながら

出入りを

繰り返します。

その快感は

人間の性行為と

比べようがなく

勇者様に

気付かれないように、

声を抑えていた私から、

簡単に喘ぎ声を、

引き出しました。

その私の喘ぎに、

勝利したように膣の蟲は、

踊るように躍動し

大量の精液を

膣内に吐き出しました。

子宮の中が、

ドロリとした何かで埋まっていく感覚は、嫌悪感と同時に、

次に入ってくる蟲の挿入をさらにスムーズにし、快感がさらに増していきました…。

ビュッ
ビュッ

あ♡

らゅ♡
もうらゅ♡



蟲の二体が口の中に入り込んでノドを犯していききました。
苦しかったですが、でも私は助かったと思いました。

声を殺してくれれます…部屋の外に声が漏れないです…。

私は勇者様にだけは絶対にこのことを知られたくないのです。

あの方のためなら死んでもいいと思える最愛の勇者様…。

今日の戦闘は過酷でした…。

最後の

勇者様の攻撃…

モンスターは、

読んで

待ち受けていました。

私はMPがないのに

敵の動きを封じる

召喚獣

『スパイダーモス』

この蟲達を

呼び出しました。

あのままじゃ勇者様が、

危険だったから、

私は召喚したのです。

召喚術師と召喚獣は、

契約によって

MPを捧げることで

協力を得る関係で

成立しています。

でもMPがないと

契約書にある

ペナルティが発生します。

MPの代わりに私が召喚獣のために働かなくてはならないのです。

その労働は女の子の場合、ほとんどが性行為なのです。



つまり私はこうなることを知っていました。

レイプされても勇者様を守りたかったのです。

私はあまりの蟲達の激しさに

絶頂を迎えます。

身体が何度も痙攣し

イクという

感覚を

脳が覚えて、

同じことを

されると

何度でも

イキました…。

私は勇者様との

性行為で

イクことはありません…。

愛しすぎていて

うまく感じれないのです。

なのに

召喚獣に犯されて

私は女の子の悦びを

知っていくのです。

私は…

身を犠牲にして勇者様を守って

勇者様への罪悪感を重ね続けていました…。



「さあ♡勇者様♡」

勇者様は、子供っぽいところがあります。

こうしたいと思われたら、人の話を聞かれない…。

今は突然、旅の途中でエッチがしたいと言われ、
みんなから離れたところであるわけですが、

勇者様は無邪気で甘えんぼな弟で、

私はお姉さんと言った感じで、こんな困った行動も
愛おいしいわけです…。

「カレンってば、もう初めてじゃないんだから、
そんなにしないでもボク出来るよ!」

勇者様の人生で初めてのお相手は私でした。

それから随分回数を重ねたのですが…つい私はエスコートしてしまいます…。



ん♡

もちろん私も初めてで…

初めて好きになった人が勇者様で…

お姉さんのようにずっと振舞ってききましたから、

エッチの時も自然な流れで私が優しくリードする形に

なっていました。

私たちは甘えんぼな弟と何でも許してしまうお姉さん…

そういう恋人同士なのです…

「勇者様♡入ってきます♡」

ん…そのまま奥まで…はい…少し止めて…

ん…はあ♡…いいですよ♡動いてください♡」

710…



あ♡あん♡

「カレン濡れやすくなったね！
すぐぐちゃぐちゃになって！
可愛い！好きだよカレン！」

勇者様の無邪気な言葉が胸に痛いです…。

召喚獣にレイプされるうち…

私の膣は条件反射的に濡れやすくなっていました。

そして普通のエッチに体は反応しなくなっていました…。

勇者様のエッチは幸せです…

愛する人と結ばれているんですから…

でも私は勇者様とのエッチは拙かった初めてから今まで、

ずっと感じた演技をしていました。



ハハ♡ハハ♡

「よし！カレン！冒険だ！」

次はゲヘナの谷に行こう！」

「勇者様待って！あそこは危険です！」

どうしてそんなに急ぐんですか！」

「急ぐよ！だって早く平和な世界にして

カレンと幸せな家庭を作らなくちゃ！」

勇者様は、私の中に射精するとすぐ身支度を整えて
冒険に戻りました…。

好きな人にプロポーズみたいなことを言われて、

止めれる女の子は1人もいないと私は幸せにはなけりませんでした…。

プロポーズ





その日の戦いは散々でした…。
明らかに格上の強敵ばかり…
そして私はいつものように、
MPがないのに召喚を
しました…。

私達は
街まで戻る
余力なく、
キャンプを
張り野営…

でも私は、
召喚獣に
MPの不足分を
返すために、
キャンプを離れて
召喚獣と夜空の下で
セックスしています…。

「姉やん…なあ…姉やん？」

聞いたるんか？

それが契約違反した奴の態度か？」

「はい…聞いてますよ…」

オークキングさん…。」

オークキングさんは、知能も高い召喚獣です…。

ごつごつした皮膚を持つ亜人です…つまり…

これは性行為…普通に私は勇者様以外とエッチしているわけです…。

強力な攻撃力を持つオークキングさんを

召喚するしかなかったわけですが…すごく罪悪感を感じています…。



オークキングさんの硬い皮膚に覆われたアレが、私の膣をぐちゃぐちゃに広げて突き上げてくる動きに、私の身体は潮を吹いてすぐに絶頂に達しました…。

思いと別の反応をする身体が憎らしい…。

「何イツてんねん？ええか姉やん聞けや…。

可愛い顔してるからってみんながエッチしたいと思いうわけちゃうねんぞ？MPなしで呼ぶつてのは喰い逃げと一緒にやで？やから罰がこうしてあんなん。」

「わかっています…。」

「ごめんなさい…。」

ヤ♡♡♡♡♡
人♡♡♡♡♡

「うちには家庭があるし妻もおんねん。MP持って帰らなベイベーも生きてけへん。姉やんとセックスしても何もええことあらへんねん。」

何か正論を言われている気がしましたがズンズンされていくよわからなかったです…。



獣姦好きでわざとMPなし召喚する

「でもワイは知っとる

姉やんは真面目なええ子やええな？勇者君に言うて

堅実に戦いなさい。

ほな……ごめんやけど
中に射精するわな。」

「ちよ……らめえ♡」

なんで中に出すんですか？

亞人同士だと

デキちゃうじゃないですか！

「え……？あ……？」

でも気持ちええから

「しやあないやん？」

あーん♡
また♡
人♡
ん♡
ら♡
ん♡

中に
でんろう♡

ビュに
ビュに

ビュッ

「おはよう」ございます♡
愛しい愛しい私の勇者様♡」
ある日の朝…宿屋にて…
私はお寝坊の勇者様の寝室へ
来ています…。



「おはよう…カレン…
少しちんちんが苦しいよ…アハハ…」
勇者様の性器は、私の胸の狭間で
モゾモゾと大きくなってきたいました…
「夜伽を望まれたのに出来なかったので
朝こうして来ました♥」

「いつもの瞑想でしょ
またMP使い
すぎたから…」
そう…

昨夜も私は
召喚獣に
レイプされて
いました…

愛しさと
罪悪感と
入り混じった
気持ち
振り直し、
普段の元気な
カレンさんを
振舞っています…

「カレン大好きだよ。」

「朝目に包まれた君は天使みたいだよ。」



「勇者様大きくなって
熱くなってきましたよ♥

いっぱいタプタプしますからね♥」

私は胸の隙間から顔を出した性器を

胸でこすりあげながら、

感じている勇者様の顔を

見つめます…。

こうしてるのが

私の

最高の幸せ…。

「勇者様…いいんでしょっか…

私なんか「んなに幸せで…。」



「まっすぐにで献身的で
天使みたいな君が
幸せにならなきや
誰も幸せになれないよ。」

勇者様は私に射精した後で、
優しくそう言ってくれました。
でもごめんなさい勇者様…
私の献身性は…
誰かに
レイプされても
勇者様に
尽くしたい…。
それほど
なのです…。

「勇者様♡

愛しております…

何を犠牲にしても

お守り

しますからね♡」

♡
いっばい
出ました。

びしょ…びしょ…

びしょ…
びしょ…



勇者様はどんどん
無謀な冒険を繰り返され、
その頃は、私はほとんど
勇者様と夜を過ごせないほどに
毎日、召喚獣とセックスする日が
続いていた…。
そんな日々がどこかで
勇者様と距離を作っている…
そんな気がしていた時期でした…。



ネチ

ネチ…

ジュル…

ジュル…

ネチ…

ジュル…

ジュル…

その日の召喚獣はバブリスライム…
苦痛はなく膣とアナルに挿入し
女の子に快樂を与えて
楽しむモンスターです。
やや粘着質と言うか…
私が隣室の勇者様を
気にかけているのを知ると、
私をそちらの壁に固定し、
声を出せない状況を作って、
快樂責めを楽しんでいました…。



ん♡

聞かせたかったです。

ビタ。

60
7
—

to

ビョウ

h

「カレンを…信じたい…
でも好きだからわかる…
ウソをつかれてる…」

隣室から最愛の勇者様の声…

「カレンさんを信じないで…

あの人が使った部屋は、いつも

ベッドが乱れてるんです…

1人なのに…」

もう1人は私の親友の僧侶の声…

信じてる2人が密会をしていて…

そして何も言い訳できない私が、

現在進行形でセックスをしていました…



勇者様と親友の密会の日から、私は仲間から少しずつ孤立していきました。作戦もうまく伝わらず、無理な召喚は増えていきます。その日のMP不足の召喚は普段と違いました…。

『天魔貴族ワールド』

魔界の貴族でありながら聖女を妻とし、天使を子供に持つ、天界と魔界の両方から貴族の地位を授かった異世界の重鎮たる存在…。

高位召喚術と呼ばれています。神格を呼び出す召喚術でした。つまり…

「君のカラダでは到底払いきれない…わかるね？カレン君

君は後でカラダを捧げれば済むと思っていた…

違う。これは重大な契約違反であり許されることではない。

ペナルティとして性行為がある…

なのに君はペナルティを受ける前提で召喚をしている…大問題だ…。」



「さあ…私の触手が入ったが…
これから産卵を…」

「いや…君のカラダは…」

「なんでも受け入れます…」

だからワルド様…

これから力をお貸ししてください…」

勇者様のために高位召喚が必要でした…

私はこの方に媚びて色仕掛けでも

力が必要だったのです。

「私の城でメイドとして

一生を過す」しても足りないのだぞ？」

「困ります…」

私には勇者様に

お仕える使命があります！」

実際高位召喚でのペナルティは

それほどまでに重いのです。

神を裏切ったに等しい悪行なのです。

このまま絞殺されても、仕方ないほどに…。

「…君には絶望を見せよう…」



私の瞳から触手が抜けました…。
圧迫感からの解放と共に別の力を
ワルド様の瞳から感じました…。

「カレン君…私の本質は目だ。
目の魔物なのだ。」

君すら知らない君の本質や
君のカラダの事まで見ることが出来る。
そして見たモノを見せることができる。
君が見たくないものまで
見せることができる…。」

「私には君を犯せない…
代わりに

君には絶望してもらおう…

二度と契約違反を行わないように…

それですべてが解決する。

することはひとつでいい

私の目を見たまえ…

ここに映してやろう…

君の愛の本質を…。」

言われるがままに、見上げた瞳には
私の大切な勇者様が映っていました…。



ドル…

そこに居たのは親友の僧侶であるリズ・プリンスと勇者様…
2人は裸で抱き合い今にも性行為に至るうと
繋がりが合っていました…。

「勇者様…
カレンさんは忘れてください…
これからは私が側に居ます…。」

リズは躊躇する勇者様に
手を伸ばして、
繋がりを求めています…。

「勇者様…私見たんです…
カレンさんが召喚したケモノと
セックスに興じる姿を…。」



「信じたくないという表情ですね…勇者様…
信じなくなっちゃったいいのです…」

私は勇者様が好きです。

でも親友のカレンさんと勇者様の

気持ちを知って遠慮していました…。」

「でもカレンさんが

そういう人なら、

私は遠慮しません…」

全力で勇者様を

奪いとるだけです♡」

リズに言われるがままに、

勇者様の性器がリズの開けた女性器に

飲み込まれていきました…。」



リズは昔から恋に情熱的で
性に奔放でした。

経験豊富なリズの艶めかしい腰つきに
すぐ勇者様は夢中になって…

リズの丰满なカラダを這い回しながら
腰を振り続けていました…

すごい♡

あ♡

もっと♡
もっと♡

そこには私の
大事な勇者様が…
私だけが独占してた勇者様が
リズに奪い取られていく姿が
映っていました…



「君が頑張った結果がアレだ…。
君の自分を顧みない自己犠牲は
本当に必要だったのか？
考えてみたまえ…。
このまま魔王を倒して
何を得れるのだ？
カレン君…。」



途中から涙で視界が曇って
何も見えていなかったです…。
そして突きつけられる正論の数々…。
当たり前のようにそうなってしまう事…
わかっていたのに否定したかった事…
全部を諭すように語り掛ける目の前の
魔物の形状をした神様に対して、
もしかしたらそれは
甘えだったのかもしれないけど、
私はこみ上げる感情の泥を
ブツけるしかなかったのです。



「あなたなんかには何がわかるんですか？何が絶望ですか？
絶望なんてしたなくせに！あんなの絶望じゃないです！」

「私にとって真の絶望は、私のような穢れた女と勇者様が

一緒になる事です！リズは親友です！

情に厚くて真直ぐで！彼女に勇者様を任せられるなんてむしろ喜ばしい事です！」



「ワルド様！あなたには私の命を差し出します！
だから魔王を倒すまでは私に召喚されてください！」

「たとえどれほど嫌われようとも蔑まれようとも
勇者様を守り通します！」

その後なら私は乳房を引き裂かれて心臓を引き抜かれようとも悔いはありません！」



私が言ったことは、無茶苦茶で理不尽な事でした…。
ワルド様からすれば、すでに生殺与奪権は握っています。
そんな条件に応える必要なんてないのです。
捕まった犯罪者が最後に何かをさせて下さいと、
泣きながら感情を露わにしただけなのです…。
でも…ワルド様は違いました…。
じっと私の顔を見つめて、
ゆっくりと落ちて着いた口調で
言ったのです…。

「いいだろう…カレン君
その時…

君の全てを私にゆだねてもらおう
拒否は許さない…。

私は穏やかであるがプライドはある…
絶望を知らないとまで言われれば、
見せるしかないのだ…

真の絶望と言っもの…。」

ワルド様は、無条件召喚を約束して
その夜は去りました。

…魔王との決戦が近い日の出来事でした…。



魔王との決戦は、余りにも力不足…。

私はみんなから孤立していて誰もフォローなんてない状態でした…。
リズや勇者様にかける言葉なんて見つからなかったのです…。

最後まで独りで立ち続けて召喚術を続けました。

MPなんて最初から計算もしてなかった…。

そこで死ぬつもりでした。

全ての召喚獣を詠唱もなしに乱発し続けて、すでに倒れた仲間たちを守りながら、
魔王が灰燼に帰しても、高位召喚で撃ち抜きました。

全ては

愛しい

勇者様のために…。

戦闘後、倒れた仲間たちに、

神聖召喚で治癒を施し、

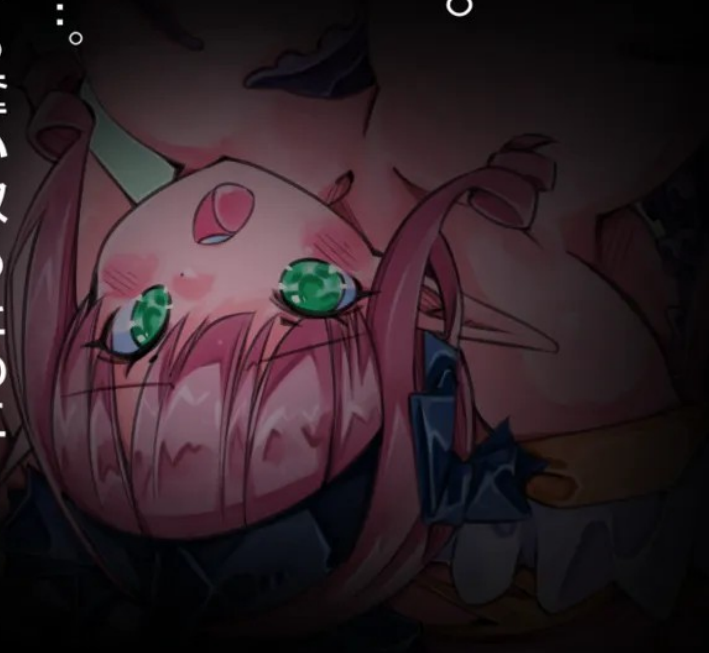
飛龍召喚で街へ送り…

私は独りで魔王城に残りました…。

これからMP不足分を私から奪い取るために

大量の魔獣、亜人、神、龍が現れると予測していました。

そんな地獄に魔王城がふさわしかったから…



ドン
ゴン

そして大量の召喚が混ざり合っとう
どうなるかわからなかったのです。
そこに現れたのは
生命が融合した
魔神とも

言えるような
存在でした…。

それが意識も持たず
私から奪うという目的
それだけを持って、
私の身体を
レイプしていきます…。

身体には吸盤を持つ
触手がい回り
私の敏感な肌に
吸い付いては離す事を
繰り返しながら
進んできます。

否応なく

濡れてもいなかった
私の膣とアナルには

二本の触手が入り込んで
射精を繰り返しながら

奥へ奥へと進んでいきます。

何もかも失った私は、

ただその行為を受け入れて
魔神とセックスをしたのです。



人っちゃん♡

また人っちゃん♡

ズニ...ズニ...ズニ...

あ♡

あ♡ら♡め♡

ズニ...

ズニ...

ん♡

あん♡

ぐっちゅ...
ぐっちゅ...



私の身体は魔神の中に取り込まれて、レイプされ続けていました…。
手足は飲み込まれて視認することもできず…ジンジン痺れた感覚だけがまだ存在している証明でした…。
限りなく続く媚薬効果の射精と、甘ったるい催淫作用のある魔神の息が浴びせられて、
魔神の体内でそれを受けるしかなく…、
その快感の雨に私は数えきれないほど
絶頂を迎えていました。



これがワルド様の言っていた絶望なのでしょうか？

この暗闇に飲まれて、レイプされて死んでいくことが絶望なのでしょうか？

やっぱり何も分かっていないです…これは私にとって救いでした…。

愛しい勇者様に蔑まれて、親友に勇者様を奪われてそれを眺めながら生きる命に
何の価値があるのでしょ…。
ここで死ぬることこそ希望なのです…。
誰にも知られずに魔神に飲み込まれて、
この世界から消えていくんです。
それで勇者様への叶わぬ思いに
苦しまないで済むのです…。



ただひとつ私を後悔させるのは、
お腹の中のもうひとつの命も失われてしまう事への
懺悔の気持ちだけでした…。

私は歪んだ魔王城の石畳の上に居ました…。
時間にして三日は過ぎていました。
ずっと魔神の中でレイプされていても生きています。
ときどき甘いスライム状のゼリーが
口に流し込まれて、空腹と水分を満たし、
子宮や内臓はイモムシさんの
糸のようなものが守ってくれました。
魔神の中に組み込まれた
召喚獣の個別の意思が
目的となって
私を守っていたのです…。



「しっかりせえ姉やん！
みんななんでMP無いって解ってて
来たと思ってんねん？
真直ぐで一途な姉やんが
好きやからにきまってるやる？
生きんねんで！」
途中でそんな声も聞こえました…。
暫くじっとして…
それからお腹の命の事を
考えて
生きなきゃって…
私は立ち上がりました。



私は故郷のエルラの村に帰って出産しました。不安もありましたが勇者様の子供でした。

お母さんにはずいぶん迷惑をかけましたが、

私の性格を知るお母さんは私を優しく支えてくれました。

高位の魔術師は仕事に困ることはなく、私は魔術アイテム生成をし、

召喚札や護衛ゴーレムを販売しながら育児をしています。

「レナちゃん女の子なのにおっぱいの吸い方がパパとぞっくり…」

私はとても幸せです。

故郷でゆつくりと

最愛の人の子供を

育てることが

できるんですから…

でも大きな不安があります。



ワールド様が見せると言った真の絶望です。それがまだ訪れていないのです…。

あの魔神の中にワルド様はいなかったのです…よくよく考えればあれほど高位の方ならあの状態でも魔力を感じたはずなのです。でも何度も召喚したので、あの時にこの世界に現れたのは事実です。どこでどんな私への絶望を用意されていたのでしょうか？召喚して聞くのも失礼に当たりますし…私の命でいいなら差し上げますが…私はこの子だけは守りたいわけです…。

その時でした。

お客様が訪れたのです。

「レナ…

おばあちゃんの所で遊んできなさい…。」

お客様の姿を見て私は絶望の意味を知りました。



勇者様がそこに居たのです…。

勇者様は私の名前を
呼びながら私を押し倒して
嫌がる私を
レイプしました…。

あん♡

らめ
です♡

「勇者様！らめです！」

レナの分のおっぱい吸わないで！」



「勇者様…聞いてください…
リズの言ったことは本当です…
私は召喚獣とセックスをしていた
穢れた女の子です…
勇者様に愛される
資格なんてないのです。」

「知ってる！全部見たんだ！
カレンはずっと僕の知ってるカレンだった！
レイプされていても
真直ぐで献身的なカレンのままだった！
愛してる！だからもう離さない…！」



ワルド様は私が強がりと言った
『私と勇者様が結ばれるのが真の絶望』
と言った言葉を強がりとしりながら
実現してくれたのです…。

や♡
すご♡
あ♡
あ♡
気持ちいい♡

そのために勇者様に
私のあるがままの姿を見せたのです。
そして私が勇者様の愛から逃げないように
その真の絶望に身をゆだねるように
約束させたのです。

ドッ

ドッ
ドッ
ドッ

ドッ
ドッ
ドッ



「勇者様！私イキます♡あん♡
イツちやいますっ♡やああ♡」

勇者様が私を抱きしめて膣奥に
射精すると同時に
私も絶頂を迎えました…。

勇者様とのセックスで私がイケなかったのは、
思えば罪悪感からだったのかもしれない。
あんなことをしていた私を知って
許してくれた勇者様の腕の中で、
私は驚くほど簡単にイク事が出来たのでした…。



そのままレナをお母さんに任せっきりで私達は夜までセックスし続けました♥

私は産後セックスをしてなくて、

勇者様は行方不明の私を

探し続けていて

2人とも久しぶりの行為に

止まりようがなく

求め続けたのでした…。

「不思議です。

どうしてワルド様は、

私にこんなに

良くしてくれたんでしょう。」

「そんなの簡単だよ

カレン…

みんなボクと一緒にさ

君と言う女の子を

好きなだけなんだよ。」

勇者様の甘い言葉に、頭が溶けそうなくらい
幸福感を感じていました。

「ボクが君を幸せに出来ないなら、

ワルドは君を連れて自分の世界に帰るって

言ったんだよ…。

愛のためにあそこまで献身的な女性を

誰もが欲しがらるだろうからね…。

もちろんボクが絶対幸せにするけどね。」



「勇者様…リズは…？
私の一番の親友です…。」

「アハハ…」

リズにはフラれたよ。
ボクが君のことばかり
言ってたからね。

あと…

君が召喚獣とシテた
理由を知った時、
激怒してたよ。

なんで説明して

くれなかったのって…

そのあと気づかなかった

自分を恥じて泣いてた…。」

「喜怒哀楽が激しくて
リズらしいです。

勇者様…

リズと私は絶対に親友です…
ですから愛人を作るなら、
リズなら許します。」

「アハハ…」

笑えないよ…ソレ…。」



「レナですか？」

私達の娘ですよ♡

ハーフェルフなので

成長が早いんですよ♡」

もちろん勇者様は、

子供について知らなかったので、
大慌てです。

「らめですよ♡

パパは、

いきなりママを押し倒した

変態さんと思ってますよ♡

慌てずゆっくりと

明日お話ししましょ♡」

まだまだ勇者様と

2人で居たかったのです。

そしてこの日のセックスで、

あつさりと二人目を授かり、

私達は、歴代勇者様史上

最大の大家族を築くことになります。

私と勇者様は、

世界で一番愛し合っているから、

当然の幸せな未来が

待っているのです♡

